

室生寺 まちづくり BOOK

2022 ~ 2023



室生寺プロジェクト まちづくり BOOK

ごあいさつ

このたび、室生地域の皆様に私たちの活動をご報告するはこびとなりました。

奈良県宇陀市に位置する室生地域には、歴史や文化を感じられる室生寺や龍穴神社、自然の偉大さや恐ろしさを学ぶことができるあさぎりホールなど、地域資源が沢山あります。盛夏は木陰と陽光のコントラストが、晩秋は紅葉と冷雨が美しく、訪れるほど魅力に溢れる地域であると感じています。

室生寺は室生口大野駅からのバスがあり、大阪など都心部からもアクセスの良いお寺です。また、1960年代以降、観光客の増加とともに形成された門前町にはお食事処やお土産物屋が並んでいます。しかし、近年は過疎化や観光客の減少により空き家や遊休農地が増加し、活力の低下が大きな問題となっています。そこで今、皆様がこれからも安心して生活でき、さらに観光にいらっしゃった方々から何度も来訪したいと思われる場所にするために、課題と資源から地域を再発見する必要があると考えます。

2022年の5月末から室生寺門前町まちづくり検討に関わらせていただくことになり、以降、市役所の方々と交えながら話し合いを続けております。また、同年秋以降、研究室学生の卒業論文「奈良県宇陀市室生集落における「まちづくりオーラルヒストリー調査」の取り組み」における暮らしの変化などの調査として、多くの地域の方々にご協力いただきました。その節は誠にありがとうございました。

この冊子には地域の成り立ちから学生で行ったワークショップの結果、まちづくりの提案まで、「好きなところ・これからしたいことが山ほどある」というプロジェクトメンバーの思いを詰め込んでいます。地域を見つめるきっかけとなり、皆様と一緒に活動していくことができれば幸いです。

大阪公立大学 都市計画研究室 プロジェクトメンバー

目次

ごあいさつ	1
目次	2
私たち学生にできること	3
プロジェクトの1年	4～6

1 部：調査の結果

地学的・歴史的観点から見た地域の成り立ちについて	8～13
データと室生集落に暮らす方々の語りから見えた室生集落の現状	14～22

2 部：まちづくりの提案

室生寺つくすツアー	24～27
多活町(たかつまち)	28～30
I でつなぐまち	31～35

私たち、学生にできること

私たち室生寺プロジェクトメンバーは大阪公立大学・大学院都市計画研究室の大学院生と学部生で構成されています。大学院生に関しては学部時代から都市計画を学んできた学生はもちろんのこと、建築メディアや意匠デザイン・プロジェクトデザイン、緑地計画を学んできた学生もあり、バラエティに富んだメンバーが揃っています。この様々な視点で室生地域の資源や課題を見つけました。

また、4人グループを3つ結成し、「活力ある門前町・室生地域」という将来の姿を実現するための具体的な提案を考えました。すぐにでも一部が実現可能なデトックスツアーから、長期的な努力が必要となる棚田カフェまで、面白いアイデアがでてきました。ぜひ皆様と一緒に計画を実現していきたいです。

学生である私たちは、何にでも取り組む好奇心と元気なところが取り柄であると自負しております。東海自然歩道を2時間かけて歩いた学生や、室生寺へ伺った際には必ず奥の院まで階段を登る学生も複数いるほどです。今後もこの熱意を持って室生寺プロジェクトに取り組んでまいります。

2022年度のメンバー

修士2年 吉岡志穂

修士1年 須崎心一、白井柊羽、神田昂奎、神出直幸、関戸陸士、沈嘯、永野真菜、
山田華梨、山村優衣、横村優

学部4年 岡崎辰哉

プロジェクトの1年

2022 年

7 月 13 日 初回打ち合わせ

学生参加による室生寺門前町地域の活性化に向けたプロジェクトが始まりました。初回はメンバーが奈良県宇陀市の現地を訪問、宇陀市や室生寺の方々に地域を案内していただき、今後についての打ち合わせを行いました。

8 月 2 日 学生会議

室生寺の未来の姿を描くため、実際に全国の門前町ではどのようなことが行われているのか各自で調べ、事例を共有しました。また、室生地域で何ができるのか、事業立案に向けて事例の下調べをインターネットや文献から行いました。

8 月 18 日 学生会議

学生たちは3つの班に分かれ、歴史文化資源、公共空間、それに自然3つのテーマについて提案して発表を行いました。その後、高木先生と意見が交わされ、次回の室生寺待ち合わせ用意する資料の構成を考えました。

8 月 26 日 室生寺提案

室生寺にて、室生地域における将来像の提案を行いました。提案についてお褒めを頂きつつも、実施に向けては調整が必要とのことです。私たち学生の当面の活動目標としては、地域と距離を縮めることで信頼関係の構築を目指すということが決定いたしました。発表ののち、室生寺拝観をさせていただいた他、龍穴神社よりさらに奥地の龍穴と柱状節理の岩肌を見に行きました。

9 月 14 日 学生会議

室生寺での発表ののち、私たちの当面の目標を元に、何をすべきか議論しました。将来の姿を地域の方と一緒に語るため、私たちが提案する室生地域の将来像を一冊の本にした「まちづくり B00K」を作成するという方針に定まりました。

9 月 30 日 学生会議

各自調べてきた全国のまちづくり冊子の事例を共有しました。それを元に、私たちが室生地域へ提案する「まちづくり B00K」の構成について議論しました。

10 月 12 日 現地調査

山上公園、室生集落を散策しました。地域を自らの足で散策し、地域の魅力や課題について肌で感じました。集落は高台に位置しており室生を一望することができ、壮大で優美な風景に癒されたのも良い思い出です。また宇陀市立図書館にも赴き、地域について描かれた書物を耽読しました。

10 月～ 学部 4 年 岡崎君の卒業研究における調査開始

11 月 12 日 学生会議

門前町の資料レクチャーについて、各班が発表を行いました。その後、現地調査と当日の流れを決めました。

11 月 13 日 現地調査

現地調査では、2つのグループに分かれ、地域を探索しました。雨が降り頻る中、室生集落や山上公園、ふるさと元気村、室生ダムなどに訪問し、地域の魅力を体感してきました。ふるさと元気村でお話をしたご夫婦に様々なお話をしていただき、室生で活動する魅力について知ることができました。

11 月 27 日 学生ワークショップ

現地調査を踏まえ、学生でワークショップを実施しました。現地調査で撮影した写真を地図に貼付し、室生地域の課題資源について抽出しました。また、課題資源の構造分析や言語化を試みました。初めてのワークショップで実験的なものでしたが、楽しみながら地域について深掘りができました。

2023 年

1 月 17 日 学生会議

「まちづくり B00K」の構成について議論しました。本書を持って地域の方々に効果的に伝えるため、私たちの提案に加え、活動報告や私たちの思い、今後の取り組みについて掲載することが決まりました。

1 月 28 日 学生会議

「まちづくり B00K」に掲載する私たちの提案を発表し、お互いに講評しました。各班の考えを共有するとともに、互いにアドバイスをを行い、提案のブラッシュアップを行いました。4月に向けてブックを作成するために、メンバーの予定調整も行いました。

3 月 11 日 第 6 回学生会議

報告会で使用する発表資料の最終チェックを行いました。

3 月 19 日 報告会 @あさぎりホール

5 月 18 日 報告会 @室生寺

プロジェクトの1年 ギャラリー

現地訪問・現地調査



学生ワークショップ



報告会



1 部：調査の結果

地学的・歴史的観点から見た地域の成り立ちについて

—文献調査でわかったこと—

須崎心一

1. はじめに

最初に私たちが室生に訪れて印象に残ったこと、それは私たちの生活する大阪には見られない陰しい山々に囲まれた生活の風景でした。私たちの生活から遠く離れたように見えるこの土地に親しみをもちたいと思い、私は室生集落や周辺集落も含めた旧室生村地域(昭和30年合併時の範囲)、室生寺門前町が形成された背景について文献調査を行いました。以下はその結果をまとめたものです。不十分な部分、不正確な部分も多いとは存じますがご了承ください。

2. 周辺の地質・地形と信仰

旧室生村の地域一帯は約1500万年前の火山活動による火砕流堆積物¹⁾が分布する山岳地帯であり、柱状節理の岩肌が露出した山々や洞窟が多くみられます。

柱状節理とは、溶岩が冷え固まり岩石となる際に体積が収縮することで五角形や六角形の柱状という規則的な割れ目ができるものです(図1)。私たち学生も吉祥龍穴へ訪れた際にその特徴的な形状の岩肌を目の当たりにしました(図2)。柱状節理のある場所は、この割れ目の浸食により縦に長く割れる傾向があり、断崖や滝といった地形が形成されやすいとされます²⁾。古来日本では断崖が磐座として信仰の対象となることが多かったようですが、室生に限らず柱状節理が特徴的な地形では断崖に摩崖仏が彫られることがあるようです。なるほどまさに大野の摩崖仏がそうであり、地形と室生の信仰と関りが深いように思われます。

地形と信仰の関係は摩崖仏だけではありません。山岳地帯である室生は水源の地として水神信仰が行われていました。さらに古代に大陸から龍の思想が日本に入ってくると、龍は洞窟に住み雨を降らす生物なので、室生の洞窟のある地形や水神信仰と結びつき龍穴信仰に繋がったようです³⁾。

室生の信仰には特徴的な火山地質・地形が土台としてあったといえるでしょう。

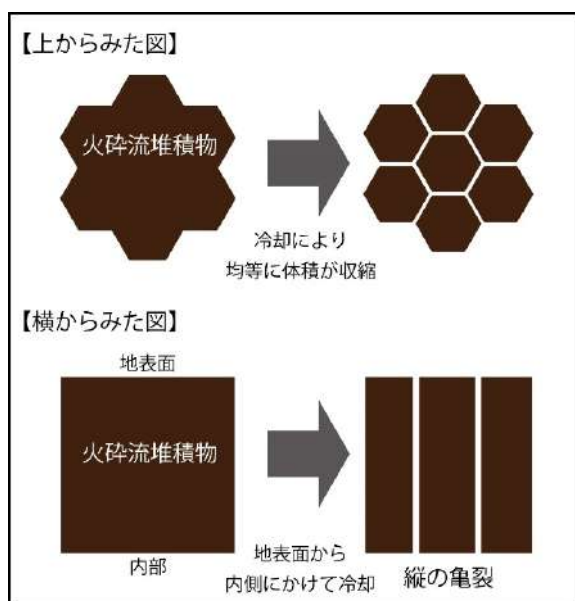


図 1 柱状節理のでき方

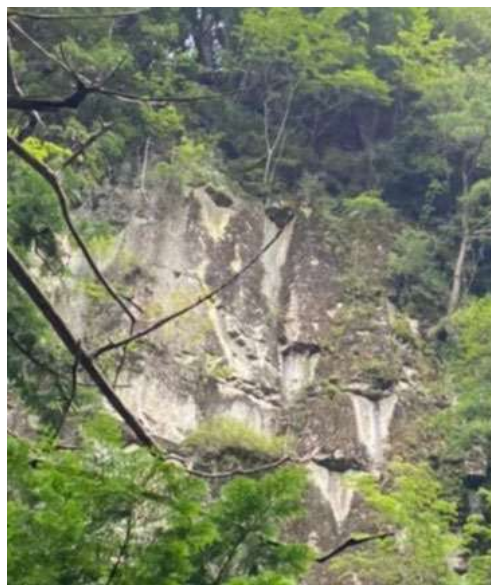


図 2 柱状節理の崖

3. 室生川と地すべりと暮らし

範囲を旧室生村から、室生寺を囲む室生集落へクローズアップしてみます。高低差のある見晴らしの良い土地に家屋や棚田状の農作地が分布しているのが特徴的です(図 3)。この特徴的な景観はどのようにして生まれたのでしょうか。

地質の話に戻りますが、室生集落部分だけは、周辺の室生地域が火砕流堆積物なのに対して崩壊堆積物となっています¹⁾。これは地すべりの繰り返しによる土塊の崩壊によるものです。

室生集落周辺の柱状節理が発達している溶結凝灰岩は、火砕流の堆積後に火砕流を構成する火山灰そのものの熱により溶解しその後固結することでできた硬質なものです。一方で、室生集落のある場所はもともと湖があり、そこに火砕流が堆積して破碎質溶結凝灰岩の土塊が形成されたと考えられています⁴⁾。この破碎質溶結凝灰岩が脆弱であるため、室生川による浸食を契機に、土塊が不安定となり地すべりが繰り返されるようになったとされます(図 4)。

この地すべりは、長い年月をかけて高低差のある室生集落の土台を形成してきました。また日本では地すべりが繰り返し起こる場所は地面を深くまで耕されたのと同じ状態であり地下水も多いことから棚田が形成されてきました。室生集落も同様に棚田が発展するのに適した場所であったと考えられます⁵⁾。現在も棚田状の土地が水田として利用されている場所は少ないですが、昔は多くが水田でした⁶⁾(図 5)。室生川と地すべりが人々に生活できる環境を提供し、集落の特徴的な景観を生み出したようです。

しかし、室生川や地すべりは人の暮らしの土台をつくるとともに災害も引き

起こしてきました。記録に新しいものでは伊勢湾台風による被害です(図6)。その様子は、室生寺と関りが深く著名な写真家である土門拳の随筆「ぼくの古寺巡礼」にも記されています。

「室生村では、その夜七時から八時までの間が台風のピークだった。氾濫する室生川は、室生寺門前の赤い太鼓橋をはじめ、川岸の農家二十数軒をアッという間に押し流した。また山津波を起して、逃げ遅れた子供を下敷にし、消防団の青年一人を死なした。」⁷⁾

この被害を受けて、室生では地すべり対策が進められました。室生集落の公園、あさぎりの里では地すべり対策に用いられている抑止杭や集水井などの土木設備のレプリカを見ることができます。



図3 室生集落の景観

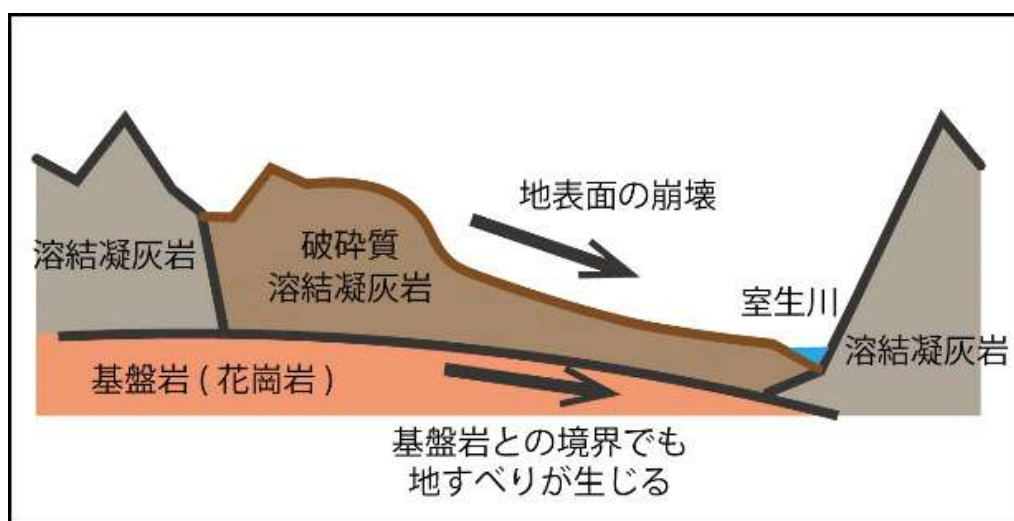


図4 室生集落の地すべり

参考文献4) をもとに作成



図 5 室生集落の棚田と現在

左写真は参考文献 6) より引用

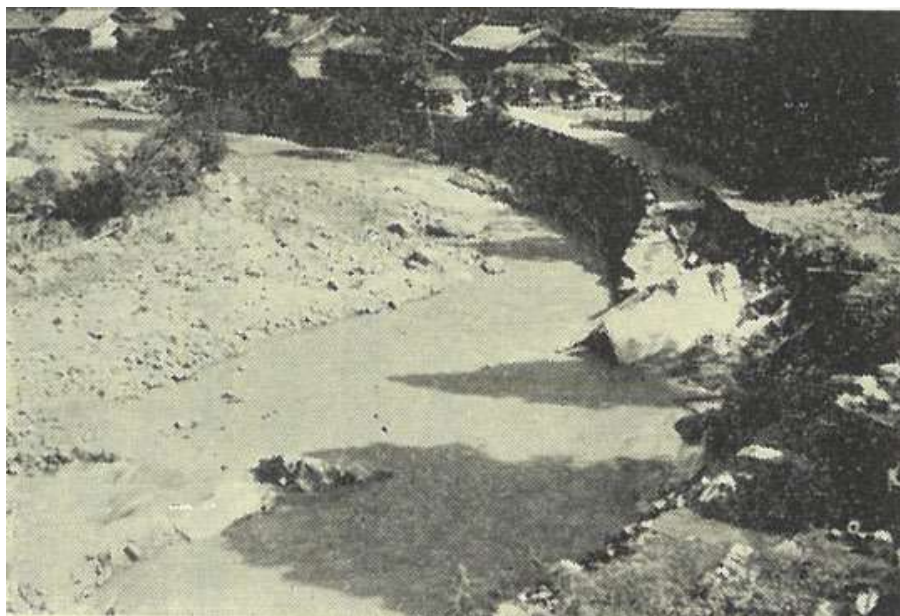


図 6 伊勢湾台風による被害⁶⁾

4. 室生寺門前町の成り立ちに関して

さらにクローズアップして室生川沿いの室生寺門前町に着目してみましょう。室生寺門前町は歴史としては古い門前町ではなく戦後の観光ブームに栄え始めたとお聞きしました。門前町の定義とは一般には「寺社の参詣者を対象として商工業者が店舗を造営し、参詣道路の両側を中心に街村状に形成された集落」（株式会社平凡社「世界大百科事典第2版」より）とされます。この定義に従い門前町の成り立ちについて近世から考察してみたいと思います。

近世は庶民の移動が比較的自由になり寺社参詣が盛んになったことによって日本各地で門前町が発展した時期でもあります。当時の室生寺も参拝者で賑わ

ったとされており、そのことは江戸時代に金堂に参拝客用の礼堂が付加されていることから把握できます。しかしながら、近世の門前町に関しては室生村史にも記述は見られませんでした。当時、室生では伊勢街道沿いでは伊勢参りの旅人で賑わったようですが、それ以外はほとんどが純農村か山村であったようです⁶⁾。

近代に入ると、橋本屋さんが1872年に創業しているということから、この時期から集落が門前町的性質を帯びていったと考えられます。しかし、橋本屋さんも単なる旅館から始まったわけではないようです。土門拳の「ぼくの古寺巡礼」には、以下の記述があります。

「室生寺門前の太鼓橋をはさんで、旅館と茶店と経営しているのが橋本屋である。橋本屋は、半商半農である。旅館も茶店も、いわばおばあさんのアルバイトである。」⁸⁾

「門前から川下へ下ったもう一軒の旅館は清水屋である。清水屋は半商半漁である。旅館は、やはり、おばあさんと娘の美寿江さんのアルバイトで、背の小さな親父さんは室生川に稚鮎の放流などをやっていた。」⁸⁾

土門拳が室生寺を初めて訪れたのは1940年ですが、橋本屋さんは旅館も茶店もアルバイトであり、もう一軒の旅館についても旅館経営はアルバイトであったのです。もともと集落全体は一次産業が中心であったが、副業として門前町的な業種の経営も行われるようになったという、室生集落が門前町的性質を帯びていく過程をこの記述に見ることができます。

戦後になると、観光ブームが到来。伊勢湾台風被害からの復興も契機に門前町が栄えたのではないかと考えます。

たしかに門前町自体の歴史は古くないですが、戦後の観光ブームで室生集落に突然現れた門前町では決してなく、地域の歴史を受け継ぎながら発展してきた門前町であることには間違いないようです。

5. おわりに

室生集落の信仰や暮らしと地形の関係、そして門前町の成り立ちについての調査結果と考察を以上に記しました。しかし、ここではまちの最も重要な構成要素である「人」については記していません。五木寛之は随筆「百寺巡礼」にて、土門拳の室生寺でのエピソードを踏まえ彼が室生寺周辺の村や人々を愛していたのであろうこと、そして室生寺を支えてきたものも地域の人々の思いであろうということを記しています¹⁰⁾。しかしながら人々の営みは文献では読み取ることはできません。岡崎君の研究は、自ら地域の人々の声を聞き、その営みの記憶に焦点を当てたものとなっています。

《参考文献》

- 1) 佐藤隆春, 中条武司, 和田穰隆, 鈴木桂子「中新世の室生火砕流堆積物」, 地質学雑誌 第118巻 p.53-69, 2012年
- 2) おおいた豊後大野ジオパーク: おおいた豊後大野ジオパークの概要
<https://www.bungo-ohno.com/about/>
(2023.03.08 最終閲覧)
- 3) 達日出典「室生寺の歴史 龍穴信仰から抗争のはて女人高野へ」, 新版 古寺巡礼 奈良6 室生寺, 淡交社, 2010年, pp.92-93
- 4) 石森善二郎, 太田英将「室生地すべりについて」, 1990年
- 5) 土砂災害防止広報センター: 土砂災害とは
<http://www.sabopc.or.jp/library/landslide/>
(2023.03.08 最終閲覧)
- 6) 室生村史編集委員会「室生村史」, 室生村役場発行, 1966年 p.115, p.276, pp.237-241, pp.1130-1140, p.1173, pp.1214-1228
- 7) 土門拳「土門拳の古寺巡礼」, 小学館, 1990年, p.130
- 8) 土門拳「土門拳の古寺巡礼」, 小学館, 1990年, p.27
- 9) 五木寛之「百寺巡礼」, 講談社, 2003年, p.14-36

データと室生集落に暮らす方々の語りから見えた

室生集落の現状

岡崎辰哉

1. はじめに

人口減少や高齢化の影響を強く受け、地方集落ではコミュニティが弱体化し、伝統的な風景・風土・文化の継承が課題となっています。それに対して、人々の定住を図る施策として、古い建造物の保存整備や歴史の掘り起こしの取組が各地で見られます。また、ハードの保存に限らずソフト面での取組として、後述するまちづくりオーラルヒストリー（以降、MOH）という人々の口述史を基に、コミュニティ史を編纂し、生活空間で行われてきた住民の共通体験を顕在化する取組も見られます。

本調査では、対象地で MOH 調査に取り組み、地域住民の共通体験を顕在化し、まちづくりの将来像の構築の一助となり、また、過疎化が進む集落での MOH 調査の取組に関する知見を得ることを目的とします。

一般的にオーラルヒストリーは、個人の口述史を記録し、分析することで、歴史へと変える作業のことです。MOH は、住民との対話形式の聞き取りから採集した地域での住民の記憶の編集により、市町村史等に現れることの少ない個々の私的な歴史をコミュニティ史として編纂することです。それにより、過去の共通体験を顕在化し、地域の将来像の構築を目的とします。作業手順は大きく 4 段階に分かれ、事前調査において調査対象を特定し、対話形式の聞き取り調査を実施します。その後、調査結果を基に得られた口述内容を整理します。以上により、本地域のコミュニティ史を編纂し、本地域のまちづくりの将来像を構築します。

ここでは調査結果についてまとめ、今後の展望について示したいと思います。

2. データから見る室生集落の現状

2-1. 人口推移

集落全体の人口推移を図 1 に示します。全体の人口としては一貫して減少しています。年齢区分で見ると、年少人口と生産年齢人口は大幅に下がっており、高齢者人口・後期高齢者人口は 2015 年頃までは増加していましたが現在は高齢者人口も減少しています。

図 2 は集落内の垣内別（概ねの区域）の人口推移を示したものです。どの垣内においても人口減少が目立ちますが、特に西出垣内・広垣内にあたる集落北西部分で著しい人口減少が見られます。

一方で図 3 をみると人口の減少傾向に対して、世帯数の減少傾向は比較的緩やかです。これは生産年齢の人口が集落の外側に転出したことで高齢者が各世帯に残っているためではないかと考えられます。

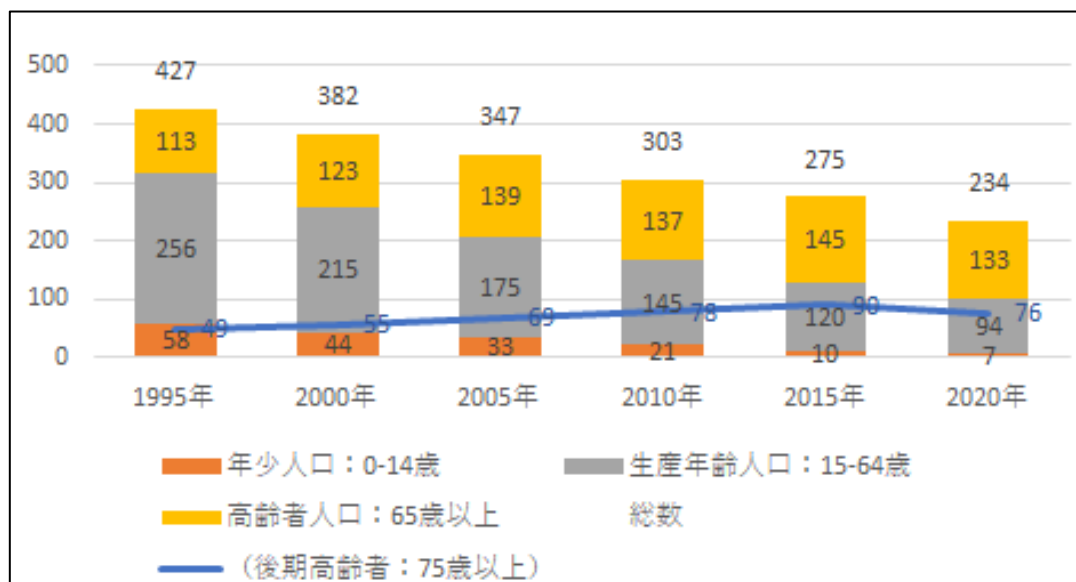


図1 集落全体の人口推移

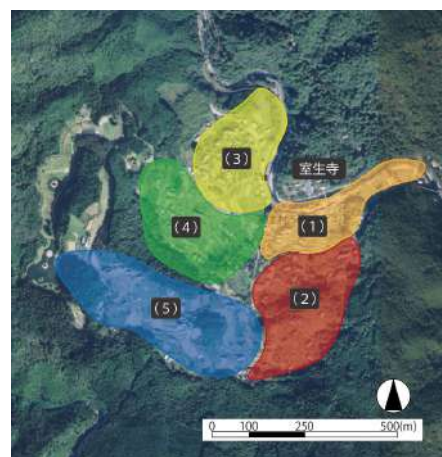
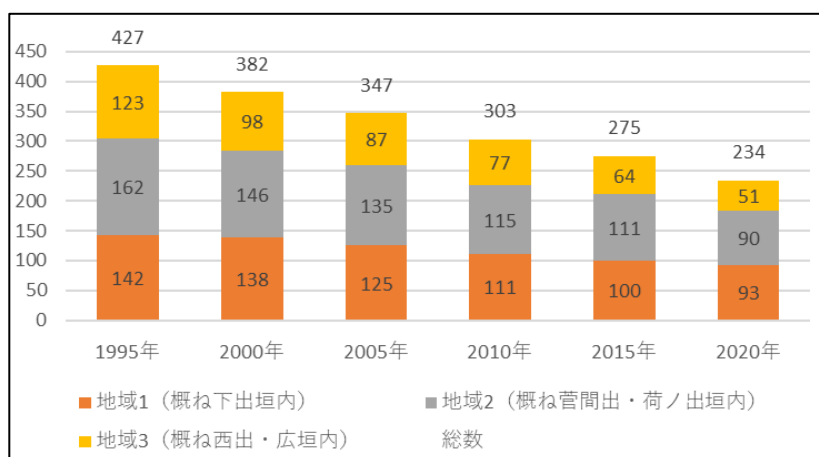


図2 集落内区域別人口推移と垣内区分

((1) 下出垣内 (2) 荷ノ出垣内 (3) 広垣内 (4) 西出垣内 (5) 菅間出垣内)

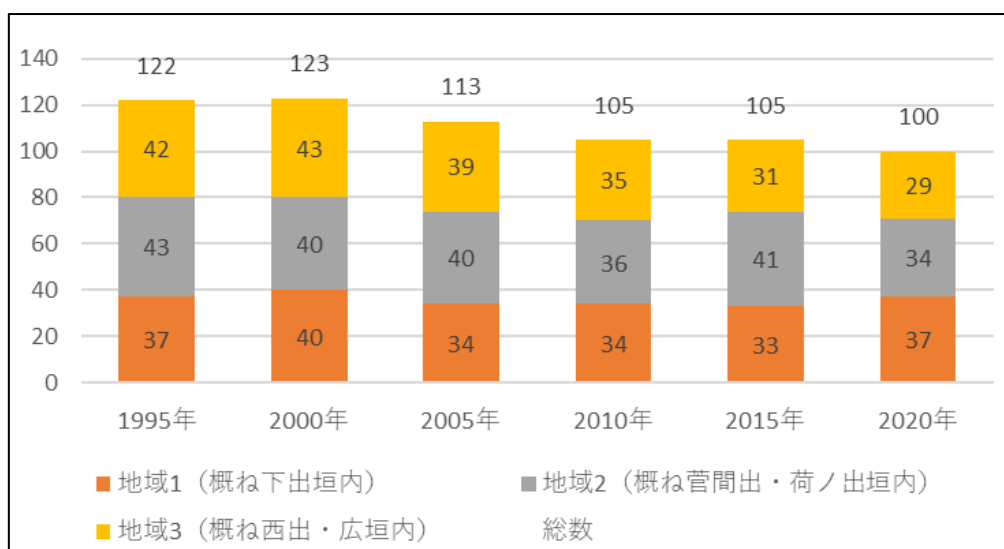


図3 世帯数の推移

2-2. 産業

図4は集落内での産業別就業者数の推移を表したものです。すべての産業において就業者は減少傾向にあり、就業者人口も1995年の230人から2020年の111人と半分以上まで減少しています。このことは、「集落の生産年齢人口の減少」と「集落内の働く場所の減少」の2つを意味していると考えられます。産業別にみると、卸売・小売・飲食・宿泊の産業就業人数が大幅に減少しており、門前町の衰退を意味していると考えられます。

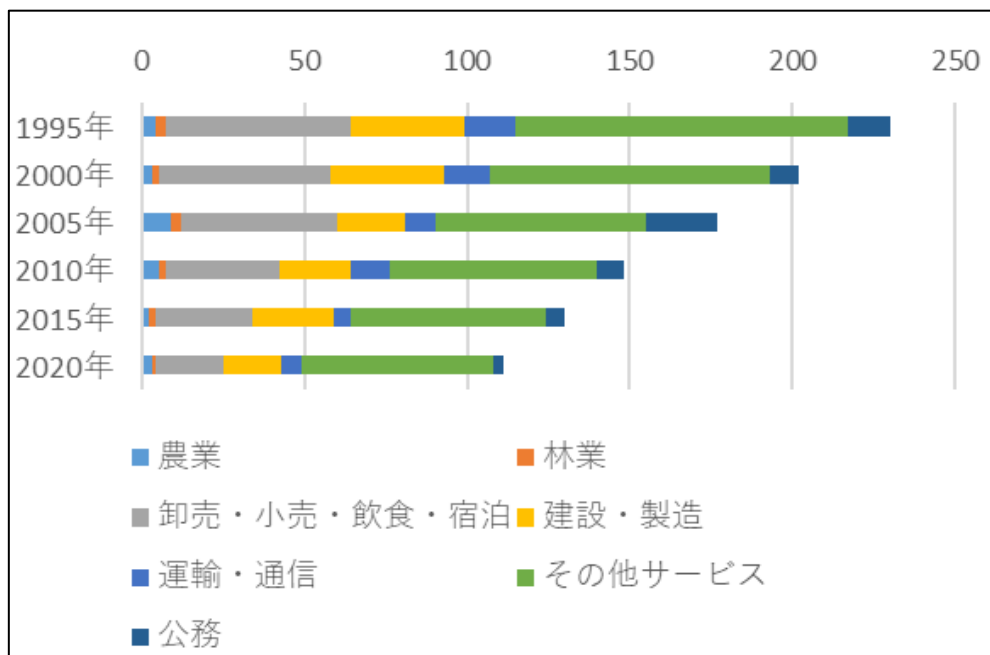


図4 産業別就業人数

2-3. 来訪者数

室生集落の代表的な観光スポットである室生寺の参拝者数は、統計上過去最高の45万人(1977年)から現在の13万7千人(2014年)へと3分の1にまで減少しています。CM等を通じたPRやイベントの開催時には参拝者数は一時的に増加しているようです。また、年間を通じては室生寺の代表的な花である石楠花の見ごろ時期である4月～5月や11月の紅葉祭りやライトアップイベントの時期には参拝者数が大幅に増加しますが、それ以外の時期は極端に少なく閑散期との差が目立ちます。

また2006年に完成した室生山上公園芸術の森は室生寺に次ぐ観光スポットですが、その利用者数は完成時には多くなっていたものの、現在ではほぼ横ばいの状態です。年間を通じては、室生寺と同じく5月と11月に増加が見られ、室生寺への参拝者数の増減の影響を受けていると考えられます。

3. 室生集落で暮らす方々の語りから見える室生集落

室生集落で暮らしてきた方々(計 17 名)の生活の記憶についての語りを基に、共通体験や地域に対して抱く思いについて以下にまとめました。戦後から現在までの時期ごとの語り(一部抜粋)を文章末尾の図 7~11 にまとめています。

3-1. 室生寺に対する印象の変化

室生寺に対する印象の変化は、以下のように大きく 3 つに分けることができました。

① 日常利用期

この時期は観光客があまり多くなかった 1959 年の伊勢湾台風以前をおおよそ指します。「田舎の小さなお寺みたいなもんでした」というような口述や「お寺の中で遊びまわっていました」という口述から、集落の住民が日常的に室生寺に訪れることが多く、集落と室生寺の関りが強かったと考えられます。門前町も現在のような観光者向けの商店ではなく、魚屋や駄菓子屋などの住民の日常利用のための店が多かったと言われます。室生寺と門前町は地域住民にとって、日常的な生活の場であったことがわかります。

② 観光地化期

この時期は 1960 年から 200 年代までの時期をおおよそ指します。伊勢湾台風以降に観光客が急増したことが語りから把握できましたが、観光客の減少については明確に感じられる特定の時期はなく、徐々に減少していったと考えられます。この時期について「観光客がおっても関係なしに遊んでいました」という口述がありながら「何となく観光客のおもてなしの場という感じがしてます」という口述もあり、この頃に室生寺や門前町が日常的な利用の場から観光客のおもてなしの場へと少しずつ変化してきたことが分かります(図 5)。



図 5 1991 年の門前町の様子(調査対象者より提供)

③ 衰退期

2000 年代に入った頃に、観光客の減少を実感し始めたと言述する方が多いことから、2000 年代頃に観光客の減少が目に見えて分かるようになったと考えられます。「室生寺で勤めていた父が亡くなってからは、室生寺のこともよくわからなくなってしまって、あんまり行かなくなりました」といった口述や、一度集落外に転出し集落にもどってきた室生寺職員の「なんか寂しい寺になったなって思いましたね」といった口述から、地域住民と室生寺の関りが弱まったと考えられます。

3-2. 室生川に対する印象の変化

室生川に対する印象の変化は口述内容から、1959年の伊勢湾台風の前後で大きく毛変化していることが分かりました。伊勢湾台風以前は、「そこで魚釣りはようしてた。魚釣りほとんどずっとしてたわ。」や「西垣内と広垣内は、あの仙人橋の下で遊んでた。ほんで、菅間出、荷ノ出、下出は、郵便局の裏手で遊んでた。上から飛び込んだりできる深いところあった。今はもう全然やけども、そこでお互いに別れて、泳ぎに行ったりしてました。」などの口述内容が見られることから、室生川が集落の子供たちの遊び場になっていたことが分かります。また、「水もっと多かった。清流やったから、底まで見えてたんや。」(No. 11)という口述があることから、室生川が現在よりきれいだと感じられていたことが分かります。

伊勢湾台風による被害について、室生集落においては現在の広垣内に位置する室生川の川床に立っていた建造物群がほとんど全て流れたという口述が多くの方から得られました(図 6)。これは伊勢湾台風を実際に経験した方だけでなく、その後に生まれた世代の口述内容にも含まれていたことから、親や学校を通じて当時の被害状況が伝えられていることが分かります。伊勢湾台風以降に生まれた方々からは「親に危ないから行ったらあかんって言われた」や「川はちょっと危ないっていうイメージがあったから、そんなに泳いだりとかあんまりなかった。その学校とかで言われた。」などという口述が得られました。伊勢湾台風以降は一部の住民にとって、室生川が近寄りがたいものとなったことが分かります。



図 6 伊勢湾台風による被害(調査対象者より提供)

また、「昔はいろんな魚がおったんよ。アマゴもおったし、サンショウウオもおった。台湾ドジョウっていう大きい魚もおったわ」という口述や、「とりあえず餌つけてたらしたら、雑魚とかが釣れたから、そんなもんを釣って楽しんでた」という口述、また「釣れなくなってきたのは、室生ダムの建設とかで水が変わってからや。やっぱり水が少なくなったわ。」という口述があることから、室生川に生息する生物が室生ダムの建設前後で変化しており、室生ダムの建設が室生川の印象に変化を与えていると考えられます。

3-3. 好きな風景

地域に暮らす方々の好きな旧室生集落の中の風景をまとめると以下ようになります。菅間出垣内や荷ノ出垣内に住む方々は自分の自宅から室生寺の方向を眺める風景と口述する方がほとんどでした。その他には、室生川に架かる太鼓橋から室生集落を見渡す風景が好きだと口述する方々や、かつての田口小学校があった生活改善センターから室生寺の方向を眺める風景が好きだと口述する方々がいました。

室生集落に暮らす方々にとって、室生集落の内側から室生寺方向を眺める風景を好む人が多いことが分かりました。

3-5. 小結 -地域で暮らしてきた方々の共通体験-

世代を問わず室生集落における共通体験は幼少期にあることが分かりました。これはこの地域の地理的特徴として、近隣の集落に行くためにも自動車や公共交通を利用する必要があることが一つの要因であると考えられます。また、幼少期の活動として多く見られたのは、室生寺での境内でのかくれんぼや探検などが挙げられたことから、かつては、室生寺が子供たちにとって、かつては公園のような場所であったことが分かります。現在では、室生集落内の子供減少や室生寺に努める旧室生集落の住民の減少、室生寺のセキュリティ強化などが相まって室生寺が日常の場所ではなくなっています。

室生川においても、かつては川の中で泳ぐことや室生川で釣りをしている人が多くいましたが、伊勢湾台風をきっかけに室生川に対して危険という印象を持たれるようになったことや室生ダムの建設・河川整備による室生川の環境の変化によって、地域住民が室生川に近寄らなくなったことが分かりました。

また、室生寺での活動は減っているものの、好きな風景の中では室生寺が含まれることが多いのが分かります。これは旧室生集落の地形が室生寺を中心に扇型に近い形になっていることから室生寺方向に視界が開けていることが要因であると考えられますが、それと過去の共通体験が室生寺にあるということも要因であるとも考えられるでしょう。

4. 今後の展望

室生集落の住民に共通して、幼少期に室生寺で遊んだという話が語られました。室生寺は、室生集落の住民にとって「日常的な利用の空間」でしたが、観光化が進んだ結果「観光客のためのおもてなしの空間」としての印象が強まりました。一方、自宅から室生寺を眺める風景が好きだという口述内容が複数見られたことから、住民の室生寺への愛着は残っていると考えられます。

以上の結果から、観光客数が減少し室生寺の状況が再び変わった現在、室生寺と室生集落の関係性を再認識する必要があると言えるでしょう。本調査の結果がプロジェクトを通じて情報共有され、室生集落のまちづくりの将来像構築につながればと思います。

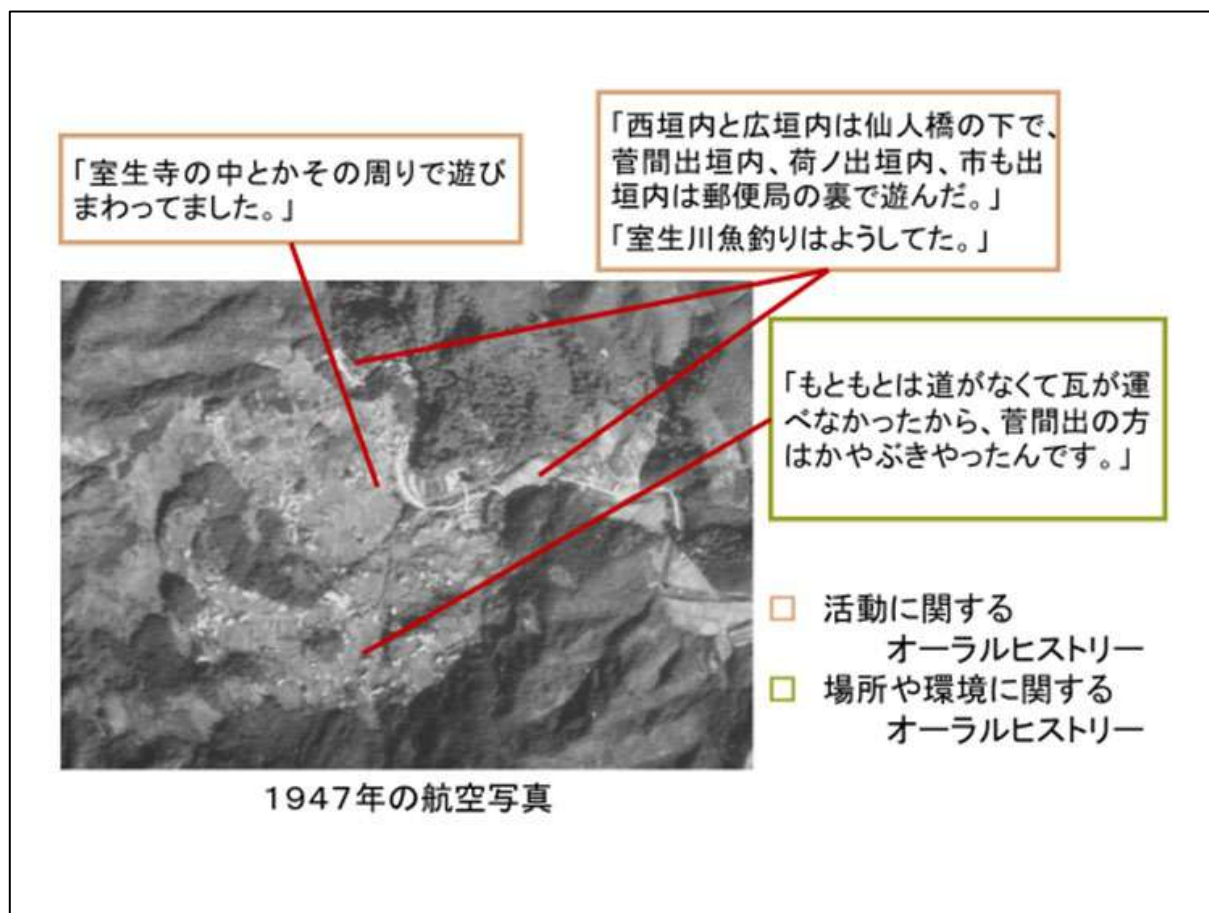


図 7 1950 年頃に関する語り

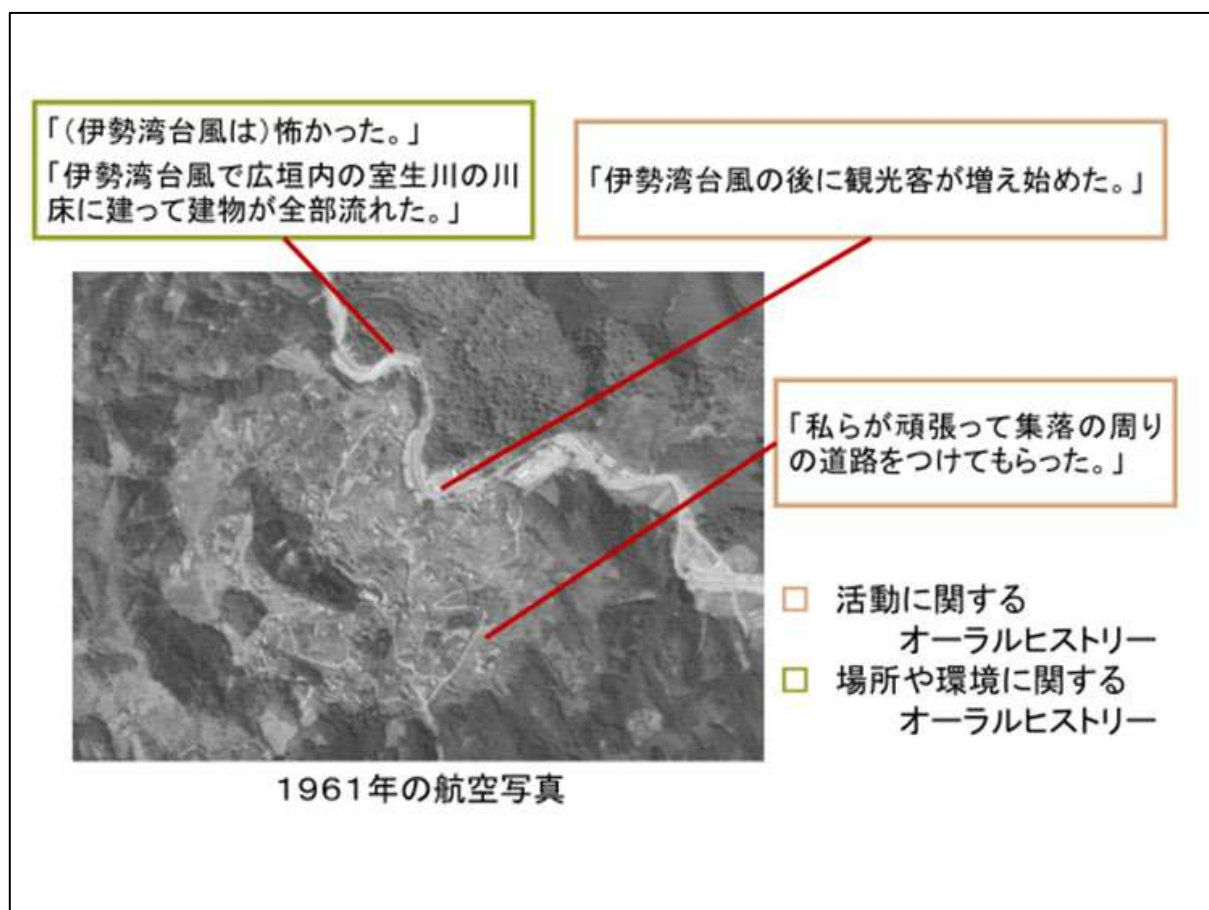


図 8 1960 年頃に関する語り



図 9 1975 年頃に関する語り

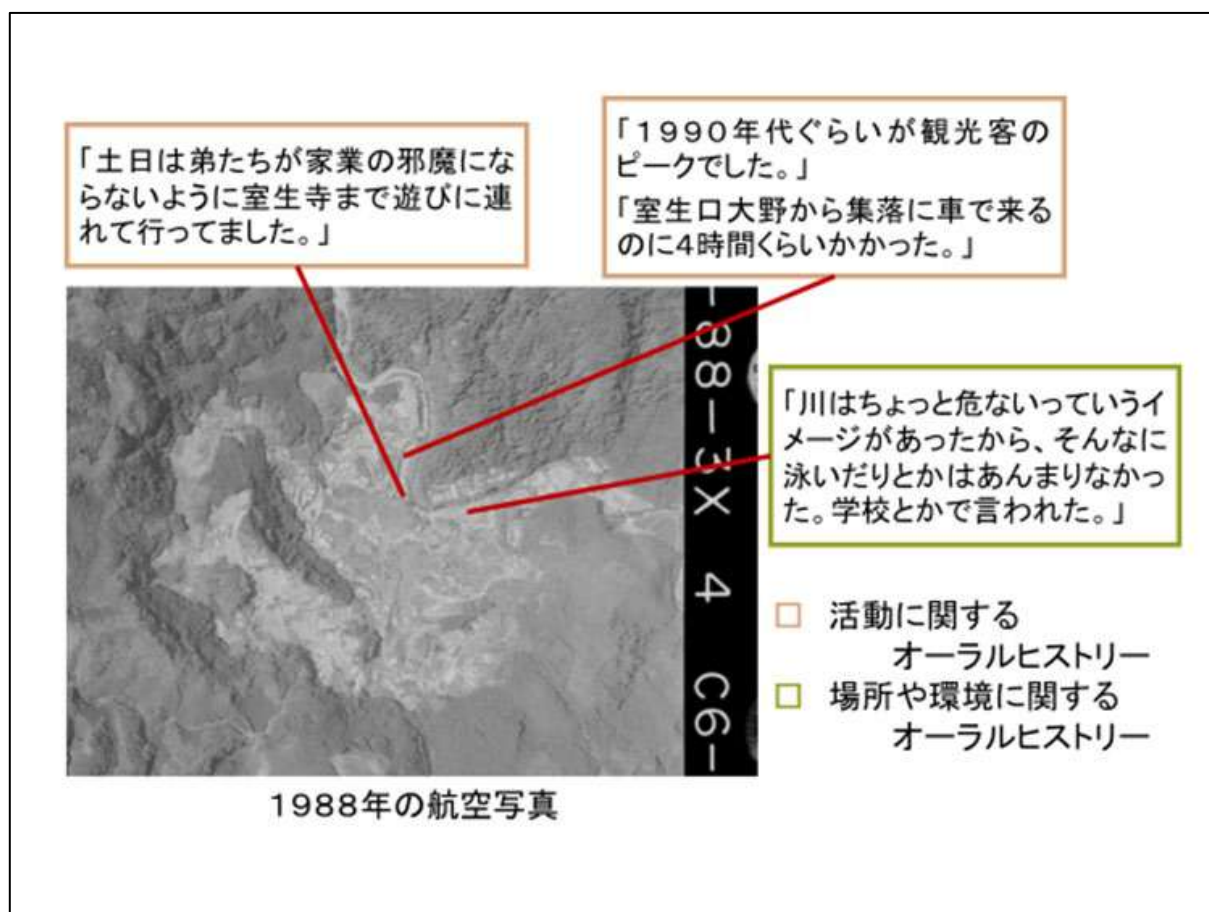


図 10 1990 年頃に関する語り

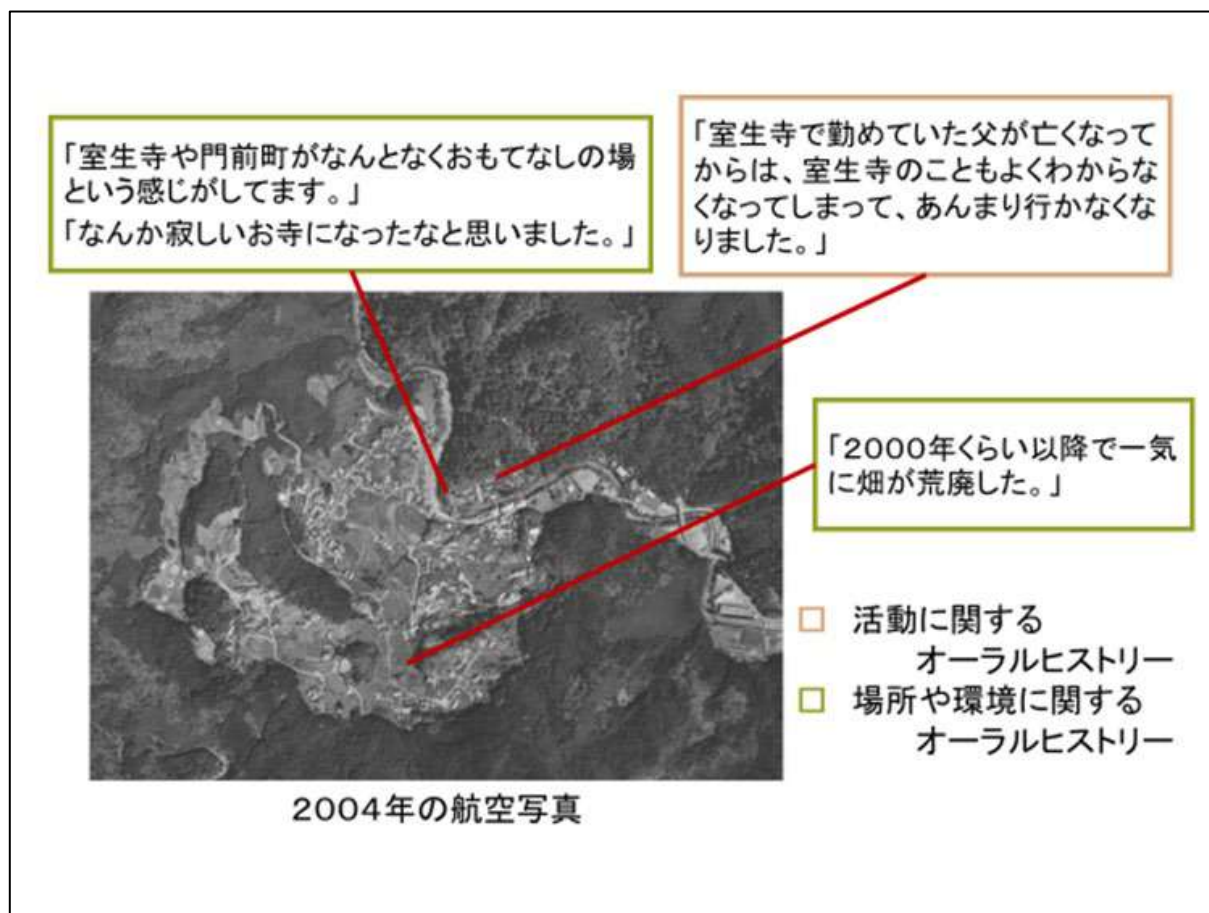


図 11 2005 年頃に関する語り

2 部：まちづくりの提案

室生寺っくすツアー

吉岡志穂、永野真菜、山田華梨、神田昂奎

地域課題

・ 関係人口の創出

地域の住民のみならず、地域外から若い世代を招き入れることで、地域の活力を高めていく必要がある。



・ 地域の魅力の発信

室生寺、周辺の自然環境、古くからの歴史など多くの魅力を外に向けて発信していく必要がある。



・ 地域訪問者の増加

地域を知ってもらうきっかけとして地域へ訪れる方々を増やし、より深く魅力に気付いてもらう必要がある。



地域資源

豊かな自然景観



自然に囲まれた奥地の空間



歴史ある寺院



ものづくりの文化



ふるさと元気村

室生地域の方々がかつて通われていた小学校を活用した施設。周辺地域の方々がアトリエを開き、ものづくりの文化を継承している。



コンセプト

室生の資源を生かした DIGITAL DETOX

DIGITAL DETOX とは

電子機器から一定期間距離を置くことでストレスを軽減し、人々の交流・自然との繋がりにフォーカスする取り組み

室生での可能性

室生では豊富な自然、地域内での人々の繋がりがあため DIGITAL DETOX の可能性がある



事例

てらつくすプラン京都・妙心寺

大本山妙心寺で、和尚さん直々に坐禅を教え
ていただけるデジタルデトックス・プラン

主な内容

- ・寺院拝観
- ・解定茶礼
- ・和尚さんの座談会
- ・朝の座禅体験



ワーケーション岐阜県養老町

岐阜県養老町で行われたデジタルデトックスを取り入れたワーケーション・プラン

主な内容

- ・テレワーク
- ・陶芸体験
- ・プチ移住体験
- ・キャンドルアート



関係主体



ツアー全体の企画

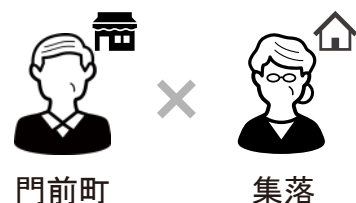


修行体験・寺ヨガ・
お坊さんトーク



室生寺

地元住民によるツアー



夕食・宿泊



門前町

川辺アクティビティ

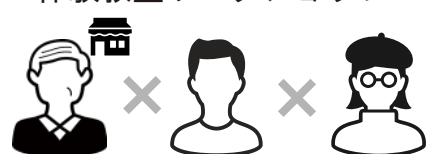


宇陀市

学生

外部関係者

体験教室ワークショップ



門前町

ふるさと
元気村

外部関係者

ツアープログラム

日程 1泊2日

参加者 女性・現代社会の喧騒に疲れた人々
30～50代・アクティブシニア
かつて女人高野として多くの女性が旅をし
辿り着いた地で、日常の世界から離れ山ご
もりを行う。

DAY1

参加者 地元住民 学生

10:30 ① 封印の義



デジタル機器封印
の儀を行いチェッ
クイン。

11:00 ② 修行体験



拝観 / 瞑想体験 /
作務衣着用で座禅
体験など。昼食は
精進料理を頂く。

14:00 ③ 地元住民によるツアー



自然あふれるス
ポット・グルメな
ど4カ所を、地元
ガイドと共に巡る。

18:00 ④ 夕食



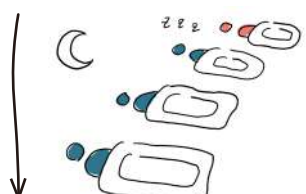
地元の食材を楽し
むことで、室生の
食文化に触れる。

19:30 ⑤ お坊さんトーク



室生寺執事の法話
をきく。対話を通
して日々の悩みを
解決する。

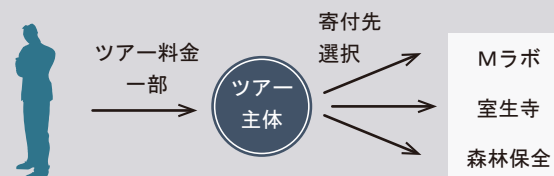
21:00 ⑥ 宿泊



室生内の宿で就寝。
明日のスケジュール
に備えて英気を
養う。

<寄付金オプション>

ツアー料金から 500 円が寄付される。
利用者は寄付先を選択することができる。



DAY2

06:00 ⑦ 寺ヨガ



朝日と共に起床。
澄んだ空気の中で
ヨガを体験する。

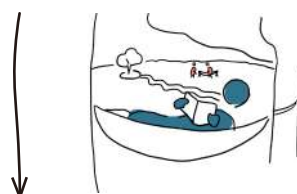
08:00 朝食

10:00 ⑧ 川辺アクティビティ



室生川で、SUP や
テントサウナなど
本格アウトドアを
楽しむ。

12:30 ⑨ 公園ピクニック



室生山上公園でラ
ンチ BOX を頂く。
読書 / 絵画など趣
味時間を楽しむ。

15:00 ⑩ 体験教室ワークショップ



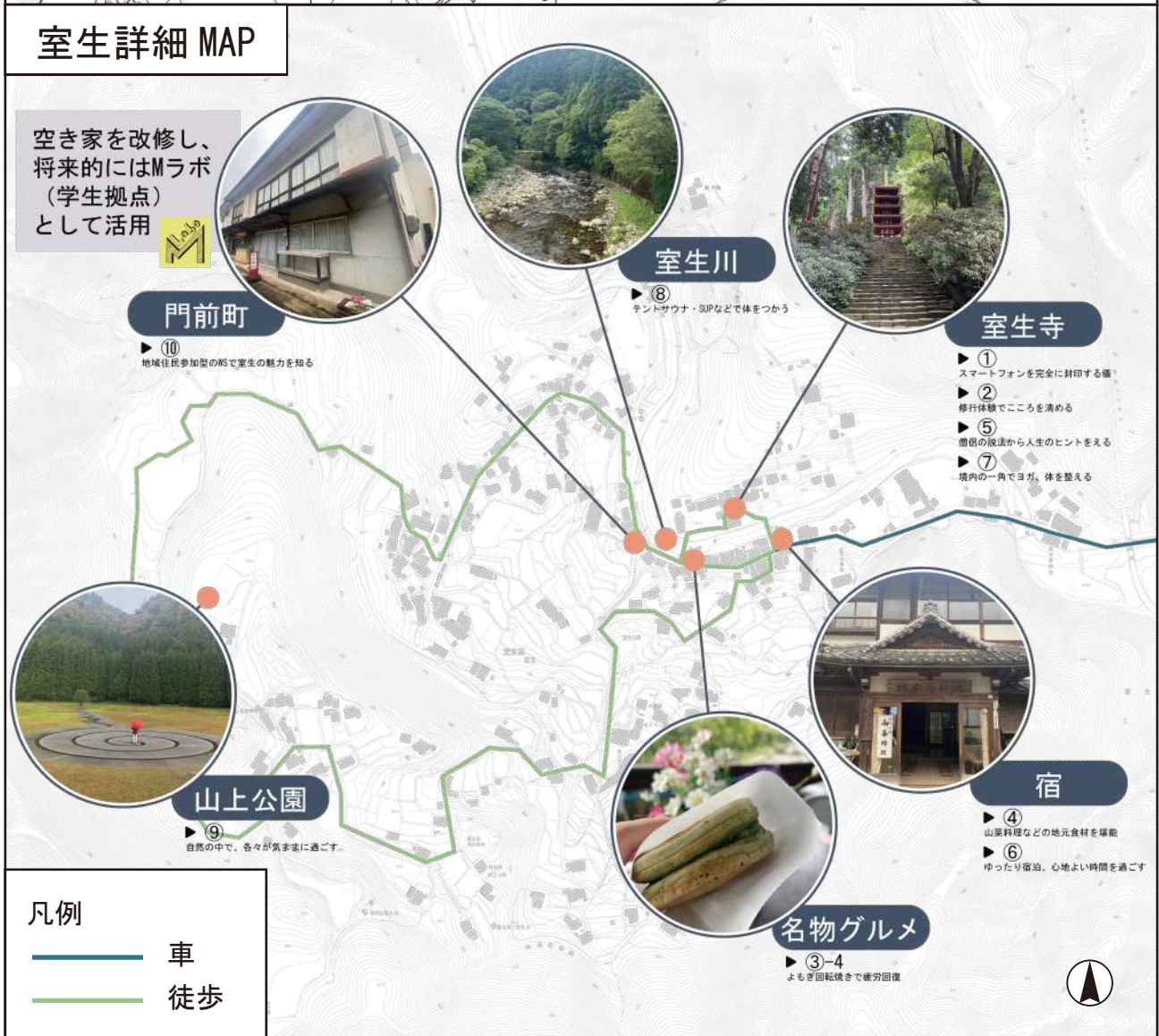
ふるさと元気村の
講師を招いて、も
のづくりや芸術を
体験する。

17:00 返却の儀

室生周辺広域 MAP



室生詳細 MAP



多活町(たかつまち)

～多世代が訪れるコンパクトで活力のある門前町～

Team Sky : 沈 嘯 白井 柊羽 神出 直幸 横村 優

背景

昔



観光客が多く賑わっていた

現在



観光客が減少し、活気を失っている

原因

- ・旅行形態の変化による観光客の減少
- ・若者の室生寺に対する認知度の低さ
- ・担い手不足による空き店舗の増加

コンセプト

従来の門前町の魅力



室生寺



門前町

外部の活力



寺離れしている若者層を観光のターゲットとする。

関西圏の若者
20～30代

大阪公立大学
都市計画研究室



「多活町」
～多世代が訪れる活力のある門前町～

■M-Lab.を設立

目的: 学生の活動拠点を室生地域につくる

主体: 学生



門前町に都市計画研究室のラボを設ける



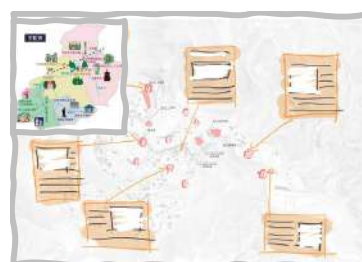
地域を知る拠点、情報発信の拠点、人同士のつながりの拠点という役割を担う

■室生地域マップ作成

主 体: 学生

関係者: 地域住民（行政、室生寺、門前町商店主）

地域外の人に室生地域の魅力や
スポットが概観できるようなマップを作成



■SNSをスタート

地域外の人に室生地域の魅力やスポットを
SNSを活用して発信する。運営者: 学生



■地域との定期的な意見交換会の開始

目的: 地域内での親睦を深める

主体: 学生、地域の有志

関係者: 地域住民、室生寺、門前町商店主、行政

学生の発表が地域の交流のきっかけとなる



■カメラスタンド・フォトフレームの設置 主体: 学生



カメラスタンドの設置



フォトフレームの設置



観光客に写真を撮ってもらう



SNSに上げてもらい室生の良さを宣伝してもらう

門前町への外部からの参入を促す仕組みをつくる

目的: 地域の活性化

主体: 学生、門前町商店主

関係者: 新規参入者

内容: 段階的に新規出店がされるような仕組みをつくる

Step.1 マルシェの取り組みの拡大

目的: 地域活性化 & 新規出店のきっかけをつくる

主体: 地域の有志(+ 学生)

関係者: 駐車場所所有者、門前町商店主、行政など

内容: ウー魂心会のマルシェの取り組みをさらに展開していく



Step.2 M-BOX(建物貸出)の設置

目的: 新規出店の足掛かりをつくる

主体: 地域の有志(+ 学生)

関係者: 空き店舗や空き地所有者

内容: 空き店舗や空き地を活用し、出店空間を提供する。
店は定期的に変わっていく。

Step.3 新規店舗が出店

⇒関係人口が増加し、まちの好循環を生み出していく

「フェーズ1(1~2年目)」、「フェーズ2(3~5年目)」での取り組みを踏まえながら、門前町全体で考える「目指す将来像」に向けて取り組みを進めていく。

目指す将来像 (案)

- ・室生寺のついでではない、目的地としての門前町
- ・新規出店者が現れ、新旧入り混じる門前町
- ・若者も含めて多世代が訪れる コンパクトで活力のある門前町



I でつなぐまち

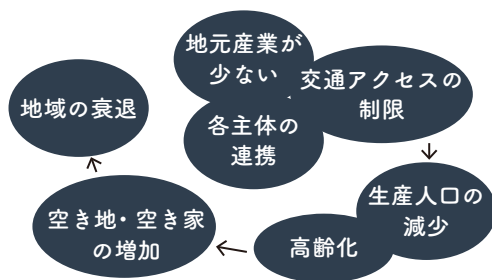
須崎心一 山村優衣 関戸陸士 岡崎辰哉

現況



地域課題

地域の問題



課題



・地域のプレイヤー増加

室生の魅力をもっと知ってもらい、地域への愛着を増加させ、そして、地域で活躍するプレイヤーを増やす必要がある

・地域の拠点づくり

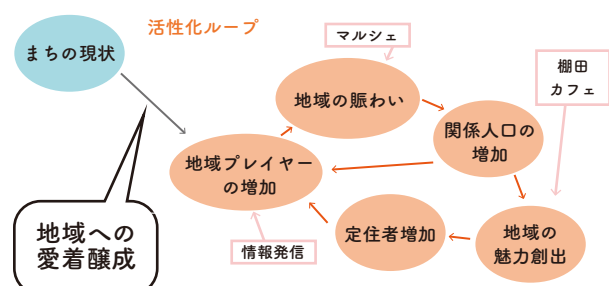
地域資源である自然や歴史を活用し、地域の拠点となる空間を創出する

・持続的なまちづくり

地域内の経済活性化と歴史の継承によって、持続的なまちを目指すこと

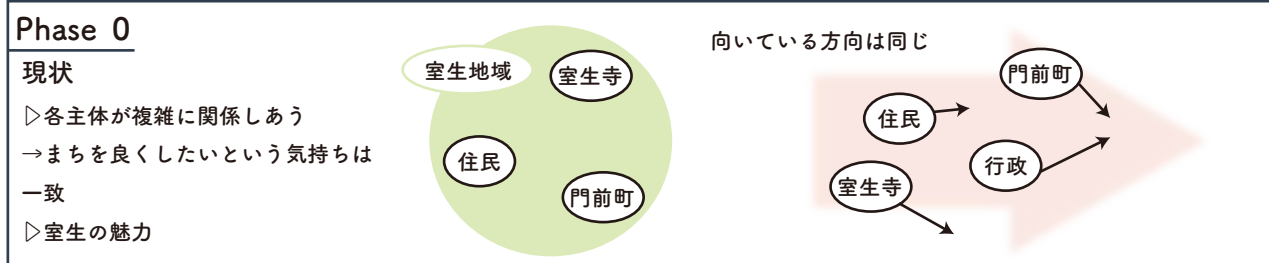
コンセプト

室生への愛着の醸成を行い
様々な地域プレイヤーによって
賑わいづくり・持続的なまちづくりを目指す

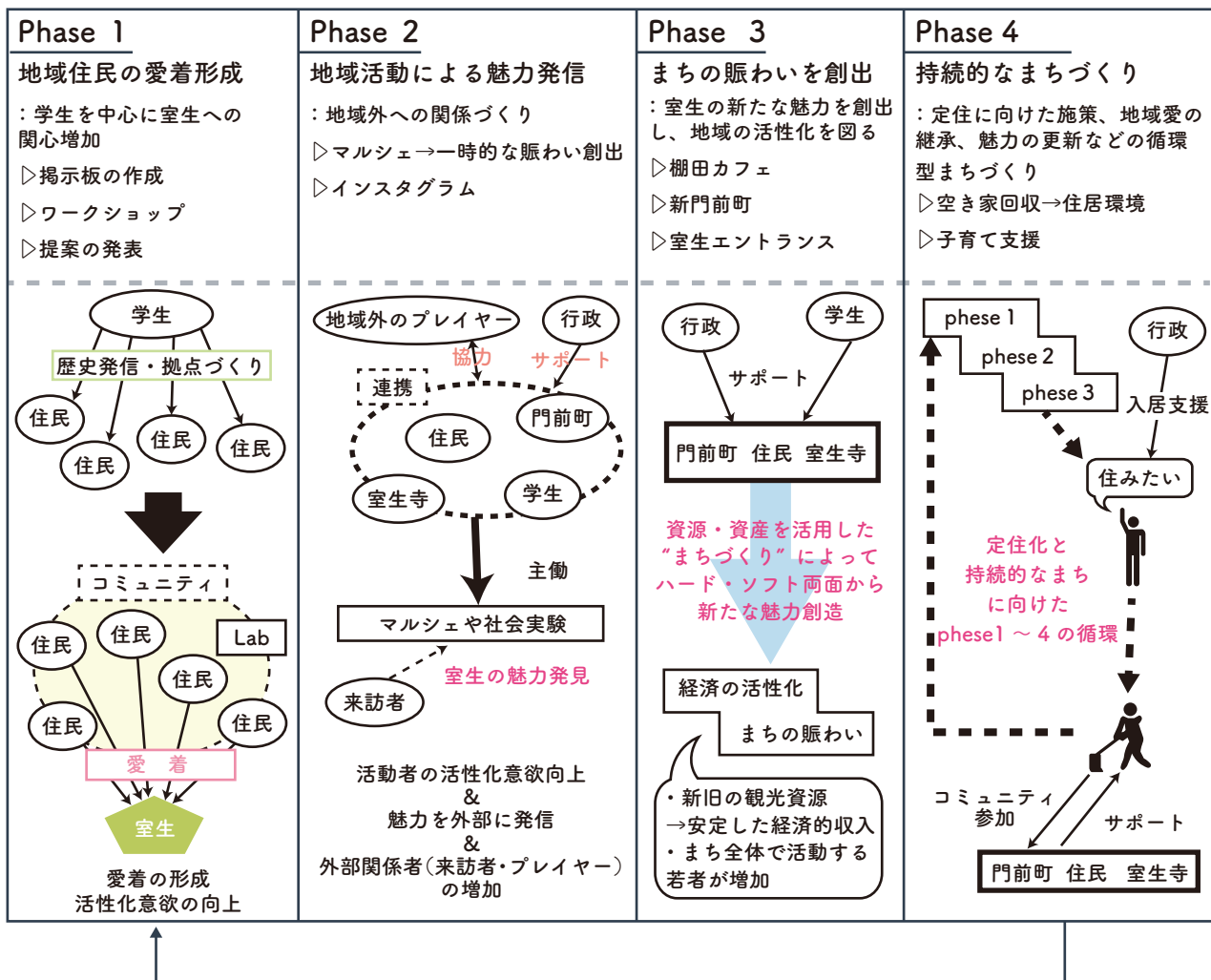


まちづくりの phase

下図は地域の発展経過を示したものである。各段階において地域で活動するプレイヤーが増加し、地域の魅力が増え、活気づいていく。また、その循環によって持続的なまちの実現を図る。



大学・プロジェクト



phase 1 : 地域住民の愛着形成

■学生拠点 MLab による情報の収集・発信拠点

- ・活動・調査の内容を地域へ発信するため、掲示板の活用、発表の場を設け、学生が情報拠点づくりを担う。
- ・地域に寄り添い、住民や来街者の声に耳を傾ける。
- ・学生ならではの目線から見たまちの可能性を示しプロジェクトを更新していく。



出所：草津未来研究所撮影 2014. 10. 24

■空間の意味付け→思い出の「場所」へ



「場所」は単なる「空間」ではない。住民の原体験、継承されてきたコミュニティの営みによって「空間」は意味を与えられ「場所」となる。ある建物や農地、路地、川、室生寺境内、その他の空間は、人々の暮らしの中でどのようなシーンの舞台となったのか。

人々の記憶から、空間を意味のある場所に解釈していくことで、門前町・集落への愛着を培うと共に今後の利活用により場所を継承していく。また、それによる愛着形成によってまちのプレイヤーとして「場所」をつくっていく。

phase 2 : 地域活動による魅力発信

■地域イベント marche

○特産加工品

定期的に開催し、室生寺の農産物や加工品やハンドメイド雑貨などを販売する。

○既存空間の活用

山上公園と室生寺をつなぐ中間エリアや、利用頻度の少ない駐車場を開催場所とすることで、室生地域での回遊性向上、地域住民の愛着度増加などを目的とする。

(image)



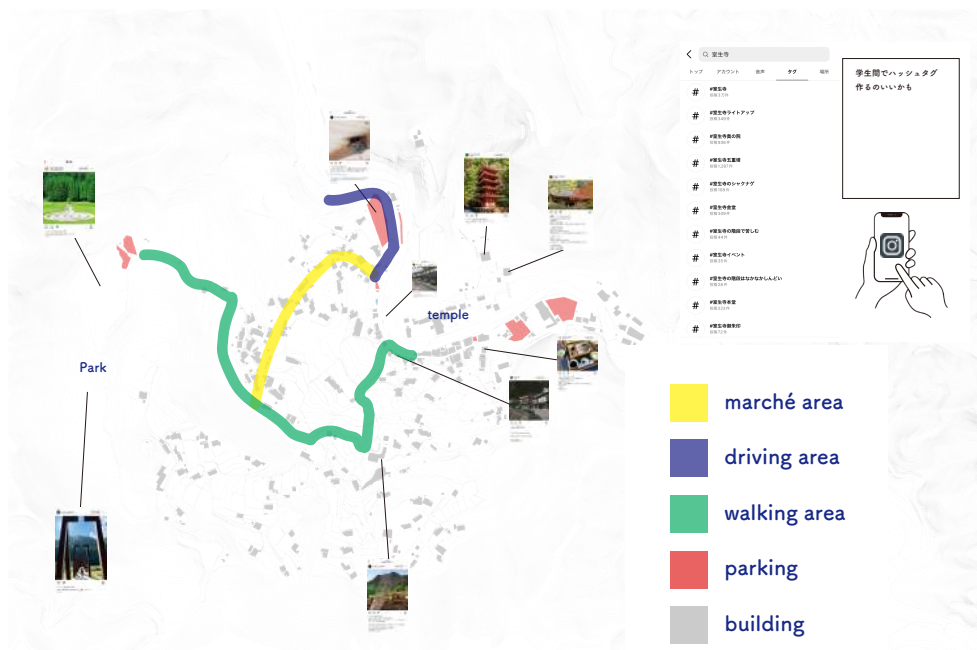
LIVE + RALLY PARK.



SHARE GREEN MINAMI AOYAMA



■広報活動 Instagram



「Instagram」を使い、山上公園や室生寺などの有名観光地はもちろん、マルシェや室生寺の自然風景などの魅力発信をする。それをもとに、フォトスポットマップの作成やイベント開催の告知を行う。

外来者の認知度の向上や室生寺に訪れたいと思わせることが目的。運営は学生を中心に行う。

phase 3 : まちの賑わい創出

マルシェやインスタの広告を通じて、地域住民の孫などの親族や来街者など多くの人に室生の魅力を知ってもらい、まちの賑わいビジョンやそのポテンシャルを地域住民に示す。次のフェーズとして、まちの循環における重要な経済循環を生むための観光資源や面的な活性化を図り、まちに長期的な賑わいをもたらす。



■室生エントランス

室生地域の玄関口となる部分に駐車場を設けることで、自転車や徒歩でまちを回遊



- ・エリア全体の経済活性化
- ・集落内の安全確保
- ・魅力発信・案内

■新門前町

○農家レストラン
地域で採れた食材をメインに農家が自ら料理を提供するレストラン。地元の農家と新規出展者と共同でメニューを考案。

○山の駅
地域で採れた食材の加工食品を販売する。マルシェ等で関係ができた周辺地域の加工食品事業者などの商品も揃え、お土産として販売する。



■棚田カフェ



里山風景や棚田の景観を生かして、食事や休憩どころとなる空間を提供する。公共空間として開放することで定住者にも憩いの場となる。

